

木曾川

木曾川文庫は治水の資料館。
水の大切さや恐ろしさを歴史から学び
これからの治水を皆様とともに
考えていきたいと思っています。
今回は木曾川流域の盆地、
中津川市から、街道の歴史を中心に、
伊勢湾台風シリーズ第四編では、
応急復旧工事の概要を特集します。



INDEX.....

ふるさとの街・探訪記《中津川市》

中部山岳地帯の要衝として発達した中津川市

AREA REPORT

度重なる土砂災害や水害を防ぐために、着々と進む砂防事業

気ままにJOURNEY

山紫水明の地は、香りたつ文化のゲ - トウエイ

歴史ドキュメント

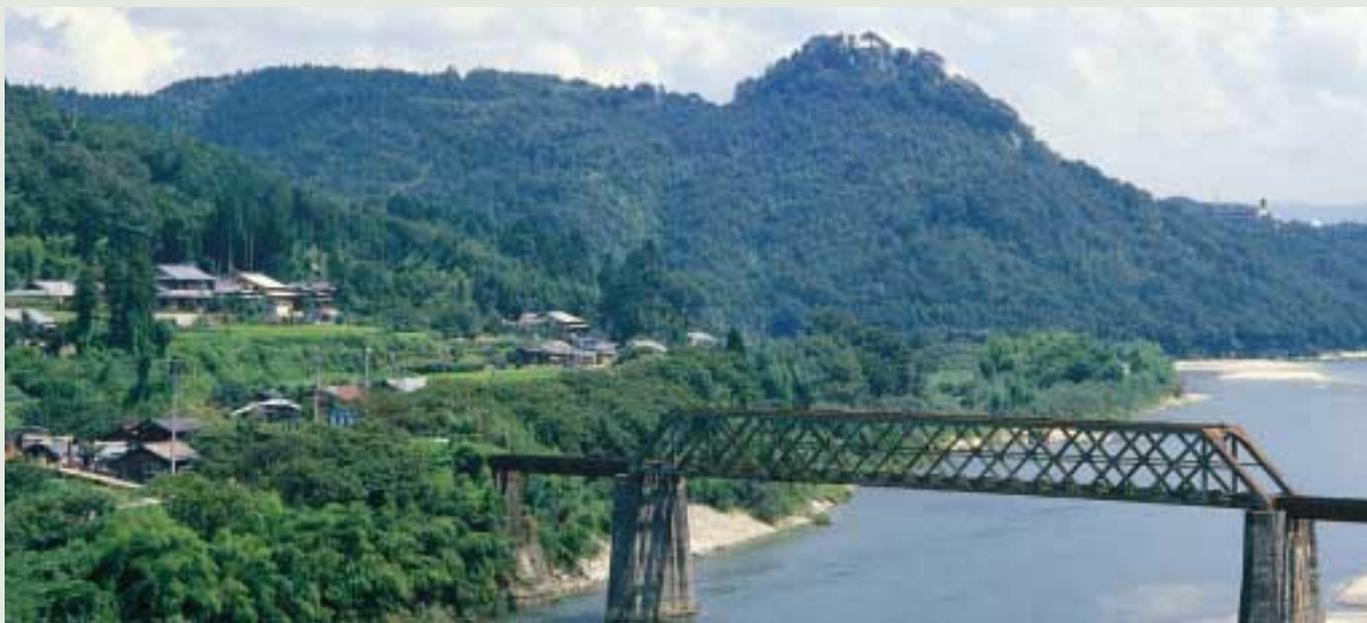
官民一体となって全力を挙げた堤防決壊口の締切工事

TALK&TALK

伊勢湾等高潮対策事業

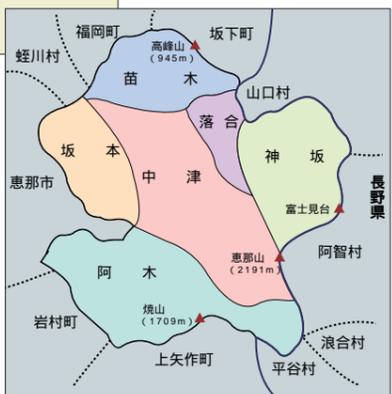
民話の小箱

赤壁城



中部山岳地帯の要衝として発達した中津川市

木曾川流域の盆地



現在の中津川市

美濃と信濃の国境に位置する中津川市は、道とともに歴史を重ねてきたところ。古くは東山道、江戸時代には中山道が縦貫し、東西の経済や文化が行き交う要衝の地でした。その一方、恵那山や木曾川などの自然環境にも恵まれ、木曾谷に先立って、盛んに林業開発された時代もありました。明治以降は交通網の整備にとともに、内陸工業都市に成長。現在は、「快適で情報ゆたかな元気都市」をスローガンに、さまざまなプロジェクトを実施しています。



中津川市街地風景

中津川市は東美濃地方の中核都市です。岐阜県の南東端にあたり、飛騨・木曾の山地と東濃の丘陵地帯に囲まれた盆地です。東部には中央アルプス連峰に連なる恵那山（2191m）が長野県との境にそびえ、南は上矢作町と岩村町、西は恵那市・蛭川村と、北は福岡町や坂下町に隣接しています。

五弁の花のような地形の中津川市は、六つの独自性をもつ地域がそれぞれに歴史を重ね発達してきたところ。木曾路の入口にあたる中津地区は中山道の宿場町、信濃国に隣接する落合地区も中山道の宿場町。苗木地区は江戸時代に城下町として栄え、坂本地区は古代の東山道の宿駅があったところといわれ、信濃国境をなす神坂地区は日本武尊の伝説の地、阿木地区は農業、林業を主体として成長、これらの地区のうち、中津町・苗木町が合併後、昭和二十七年市制施行以後、隣接四か村を合併して今日に至っています。

数々の伝説を残す神坂峠

中津川市の歴史は道によって発達してきました。古くは東山道、江戸時代には中山道がこの地域を横断し、東西の経済や文化の流通を促していました。東山道が整備されたのは奈良時代のこと。都を起点にして地方へ向かう七つの官道が建設され、そのうちの東へ延びる道が、太平洋に沿った東海道、中部の山岳地帯を進む東山道、日本海側の北陸道の三道です。今の岐阜県は当時、美濃国と飛騨国に分かれていましたが、両国とも、東山道に属する国。美濃国内の東山道には、揖斐川、長良川等の大河の渡河をはじめとする数々の難所があり、その中でも美濃国最後の坂本駅を出て、信濃国阿智駅に至る神坂越えは、東山道中最高地点を通る難所中の難所として聞こえたところでした。

この峠はすでに日本武尊伝承の中でも語られており、こうした特徴ある祭祀を示す五十六世紀の石製模造品が多数出土。歴史の深さを物語っています。神坂越えの道は、平安時代に入っても機能しており、神坂地区平遺跡からは緑釉椀や灰釉陶器が見つかっています。



東山道と宿駅

東濃の名門、遠山氏

平安時代末期、平家追討を旗印に木曾谷で木曾義仲が挙兵すると、落合に配下の落合五郎兼行を配置して美濃国をかため、中津川市をはじめ恵那市一帯は、木曾義仲の勢力下となり、しかし、頼朝との覇権争いで義仲が失脚すると、この地は加藤景廉の支配下に置かれました。頼朝の挙兵以来、頼朝を助け活躍した景廉はその功勞としてこの地の地頭に任じられ、その子、景朝はこの地に土着して遠山氏と改姓、東濃地方に一大勢力を築きました。その勢力範囲は、旧恵那郡、瑞浪市、土岐市の一部から長野県西部にいたるまでの広大な範囲に及んだと思われまます。

遠山氏一族による支配は南北朝期の争乱を境に徐々に勢力を失い、下剋上の戦国時代になると、苗木遠山・明知遠山の両家を残すのみとなりました。その後、この地方一帯は森蘭丸、長可、河尻貞次と支配者が変わり、この間、苗木遠山氏は、木曾川以北の領地から撤退しています。

天下を分けた関ヶ原の合戦後、この地方一帯は木曾出身の豪族山村氏、千村氏とその一族が知行し、苗木は遠山氏が旧領を回復しています。

木曾谷と河川の一元管理

中津川は、木曾路の入口。木曾は都と東国を結ぶ要衝の地であると同時に、良材の産地であったため、近世以降の為政者はこの地を直轄地とし、木曾谷と木曾川、飛騨川の一元支配を行っていました。

木材需要が急速に高まるのは近世に入ってからのこと。駿府城、江戸城、名古屋城をはじめとした大規模な城郭の築造をはじめ、寺社建築、住宅建築、土木用資材等の木材需要はますます高まり、火災・地震等の災害による大きな消耗は、その需要度を一向に減退させませんでした。

秀吉時代の用材産地は、木曾に属していた恵那山麓の湯舟沢山と、木曾川以北の裏木曾

参考文獻
『中津川市史』中津川市
『わたしたちの中津川市』中津川市教育委員会
『中山道 中津川紀行』中津川市商業観光課
『中津川市制四十五周年記念要覧』中津川市
『岐阜県の明治維新』岐阜県博物館
『川に生きる』水運と漁業』岐阜県博物館
『特別展 美濃・飛騨の古代史発掘』岐阜県博物館
『岐阜県地名大事典』角川書店

「国土開発に生涯を捧げた可知貫一」

可知貫一は明治一八年、阿木村飯沼で生まれました。幼い頃より神童の誉れ高く、明治四四年には東京帝国大学農学部へ入学。

卒業後、農商務省の耕地主任官として、岐阜県に勤めました。当時は、日本国内慢性的な米不足の時代、山地を控える中津川も同様、新田開発が急務の課題でした。しかし、水田を開発するためには、用水の開削が必要です。大正五年、落合集落では可知貫一技師を招いて調査を依頼。可知技師の設計により、大正七年より大久手用水の工事に着手。同九年には六二haの水田へ水を送る水路が完成しました。その後、可知技師は京都帝国大学の教授に就任。第二次世界大戦後、農林省の開拓顧問となり、飯野湖池、洗井沢ため池、苗木のほ場整備、付知川右岸用水、阿木川タムの設計などに尽力しました。昭和三年、七歳で夭折を全うしています。葬儀には全国から多くの人々が集まり、そのため大井駅（恵那駅）に受付が置かれたほどでした。こうした偉業をたたえ、阿木



可知 貫一

ふるさとの街・探訪記



遠山友政像 (中津川市遠山史料館蔵)

中津川宿と落合宿

中山道は江戸幕府が管轄する幹線道路である五街道の一つであり、東海道とともに、江戸と京都、大坂（現在の大阪）を結ぶ重要な街道でした。

美濃国には落合・中津川をはじめとする二六の宿駅があり、落合宿と中津川宿は江戸から四

四番目と四五番目の宿駅でした。落合宿は信濃



部分間延絵図 一 中津川宿一

庄屋をしており、問屋も兼ねていました。本陣井口家の表門は文化二年（一八一五）の大火で焼失し、現在のものはこを定宿とした加賀藩から贈られたものといわれています。

中津川宿は木曾路の玄関口として栄えた宿場町。毎月、三と八のつく日に六斎市（定期市）が開催され、商業活動も盛んでした。六斎市では穀物のほか塩・味噌・タマリ・酒・小間物・呉服・古着・綿・紙などが取り引きされ、苗木藩や木曾谷の村々からは、楮・蒔・木綿・檀立・木地物などの特産物が集められ、各地へ送り出されました。今も残る卯建のある町並みは、往時の繁栄を物語っています。本町にある道は鍵の手のように曲がった桧型構造、軍事上の必要からとも客止めの策ともいわれています。

苗木藩最後の藩主と廃仏毀釈

幕末のころ、東濃地方では尊王思想をもつ平田派国学の門人が数多く輩出されました。文政二年（一八二二）、中津川宿の豪商の家に生まれた関秀矩が、この平田学派入門したのは、安政六年（一八五九）のこと。以来、国学に傾倒した秀矩は、勤王家として東濃地方の中心的存在となりました。苗木藩最後の藩主、遠山友禄は幕府の若年寄を勤めましたが、戊辰戦争の折には平田

学派の意見を取り入れ、王政復古、祭政一致を理想に掲げ、官軍側につきました。明治政府が樹立した後、苗木藩知事後に県知事として就任した友禄は、廃仏毀釈を断行。旧苗木領内はすべて神葬にし、寺院もすべて廃寺。仏像など焼くか埋めるといって徹底ぶりでした。友禄が行ったもう一つの特徴ある施策は、士族の帰農、家禄奉還でした。この藩財政を立て直し策は失敗し、士族の暮らしは困窮を極めました。友禄は、帰農が誤りであったことを認め、旧藩士の復讐、復讐運動を行うとともに自らの土地を売って、帰農した藩士を救済しています。

県下有数の内陸工業都市

明治三五年、国鉄中央線名古屋〜中津川間開通以来、中津川駅を中心に商業活動が活性化し、東濃地方だけではなく木曾谷一帯の中核都市として繁栄しました。工業の歴史も古く、山林資源や労働力に恵まれたことから、市内に製糸、製紙、電気製品等の主要工場が明治の中期から昭和初期にかけて建設され、昭和三〇年代には主要工場を中心に関連工場を誘致し、県下有数の内陸工業都市として成長を遂げました。

昭和四四年一月、浜高線（飛州街道）は国道五七号に昇格。同五年八月、自動車トンネルでは、世界最長のモンブラン・ゴツトハルト・トンネルと肩を並べる中央自動車道恵那山トンネルが開通し、中津川市は伊那・木曾谷の玄関口となりました。

中部山岳交通網の要衝として、交通・経済の中心都市としての要索を備える当市は、中津川駅前の再開発、青木ヶ原の工業団地の開発を進め、装いも新たに中部経済圏の一翼を担う内陸工業地帯として、各種工業・商業の発展と農業の近代化を促進しています。

度重なる土砂災害や水害を防ぐために、着々と進む砂防事業

山々と河川が形成する扇状地

中津川市は東を木曾山脈、南を三河高原北を阿寺山地一ツ森に囲まれた盆地です。南東には中央アルプス連峰に連なる恵那山がそびえ、これらの山々から流れる中津川、四ツ目川、落合川などの河川が形成した沖積地に中津川、坂本、落合などの町並みが開けています。市の南東部及び木曾川流域には、急傾斜地が広く分布しており、古くから河川の氾濫や土砂災害に悩まされてきました。

地質の特徴は、河川によって形成された扇状地、基盤上には木曾川に由来する第二紀の砂礫層、御岳山に由来するローム層、恵那山系の押し出しといわれる風化の進んだ角礫層等の堆積がみられ、降雨などによる山地崩壊の起こりやすい特性を有しています。



災害の歴史

中津川市は太古の昔から、災害に悩まされてきた地域です。中でも木曾川左岸支流の中津川、落合川の歴史は災害との闘いでした。中津川市内を流れる四ツ目川周辺には数多くの水神祠が祀られ、水害の多さを物語っています。文献によれば、古くは宝暦元年(七〇〇)の「美濃地方騒動」に始まり、康平元年(一〇五八)まで四回の大きな災害の記録が残されています。近世では元禄一〇年(一六九七)から昭和七年までの二二五年間に二一年に一度の割合で災害が発生したことになります。人々の苦悩をうかがうことができません。特に、文化五年(一八〇八)と昭和七年の災害は同規模の大災害であり、新暦に換算すれば、まさに同じ日に発生したといわれています。



砂防工事の変遷

こうした背景のもと、四ツ目川を含む中津川流域は子野川流域及び落合川流域とともに内務省の直轄砂防区域に編入され、昭和二年度より工事が開始されました。

当初の工事区域は、木曾川左岸支流の中津川及び落合川の合流点、特に被害の大きかった四ツ目川を中心に工事が進められました。その後、荒廃の著しい中津川、落合川の各支流においても砂防ダムが施工されました。

しかし、第二次世界大戦が勃発し、砂防工事が縮小される一方、戦時中の森林の乱伐が原因となり山地の荒廃が進みました。

昭和一〇年、第一次世界大戦が終結すると戦後の復興とともに治山治水の事業も徐々に増えこれに伴って中津川、落合川流域の主要地点に砂防ダムが施工されることとなりました。また、昭和三年及び昭和三年の豪雨により中津川流域が被害を受けたため、緊急砂防事業費、昭和三年度、特殊緊急砂防費、昭和三年度を投入し、砂防事業の推進を図るとともに、

砂防計画の改定を行い、整備の遅れている中津川流域を重点的に施工することになりました。その後、中津川、落合川流域における市街化や、本流域を縦貫する中央自動車道、国道一九号の中津川バイパスが開通するなどの都市開発が進展すると、砂防事業も流域の開発状況に合わせた工事が進められるようになりました。

現在の砂防事業

木曾川流域の砂防事業は、落合川、子野川及び中津川の各流域で、現在、実施されています。落合川、子野川及び中津川の各流域では、平成七年度までに砂防ダム二四基、床固四箇所(七基)、流路七箇所が完成しています。

《落合川水系の工事》

落合川流域では、昭和二一年に日陰第一堰堤工事が開始され、その後、落合川本谷及びその支流を中心に工事が進められていきました。しかし、昭和三三年や三四年には梅雨前線や台風などの豪雨により、本谷、冷川、池の谷、柳、樽川などの主要支流から流出した土砂による大災害が発生し、さらにその後の中小洪水によって、冷川と池の谷合流点付近より河床の低下が始まったため、この多大な土砂の二次移動が原因となって下流に大きな被害をもたらしました。

このため、昭和三八年より縦横侵食の防止を目的として、冷川及び池の谷の流路整備に着手し、昭和六二年度に落合川流路工(流路延長一八三〇m)が完成しました。

その後、落合川上流域支川整備も進められ、平成七年度に、中津川市の地方特定河川整備備



事業によるリゾート開発計画にあわせ、水と緑の砂防事業により景観、親水性、生態系に配慮した流路工が完成しました。

現在、湯田川流路工整備が進められています。

《中津川水系の工事》

中津川は昭和七年の四ツ目川の災害後、まず被害の激しかった四ツ目川流域を中心に工事は進められ、その各支流で砂防堰堤が次々に完成しました。

現在、土石流対策施設として四ツ目遊砂工の工事が行われています。

その一方、中津川本川では昭和三六年の豪雨により、川上地区に土砂災害をもたらしたばかりでなく、中流部に多量の土砂を堆積させました。そこで、堆積土砂と流路上の固定を目的とした川上流路工(流路延長八〇〇m)が施工され、昭和五五年度に完成しました。

また、整備の進む四ツ目川中流部では、屈曲が多く、流路が乱流し、河岸の侵食が著しくなってきたため、山神砂防ダム下流の既設砂防ダムから上流の四ツ目第一砂防ダムに至る区間に、四ツ目川流路工(流路延長一七〇〇m)を施工し、昭和五〇年度までに完成しました。

現在では中津川上流域を中心に工事を進めており、土石流危険渓流に指定されている松尾谷では、平成元年度には、当地最初の鋼製砂防



- 参考文献
- 『中津川市河川環境整備計画 策定委託業務 報告書』
 - 『中津川市財リバーフロント整備センター 21世紀をめざしたわが街の河川整備構想 報告書』 中津川市
 - 『中津川河川環境整備事業のこ案内』 中津川市
 - 『四ツ目遊砂工 四ツ目川』 建設省 中部地方建設局 多治見工事事務所
 - 『中津川市制45周年記念要覧』 中津川市
 - 『建設省多治見工事事務所 開所五十周年記念事業関係の新聞記事』 建設省 中部地方建設局 多治見工事事務所
 - 『木曾三川治水百年の歩み』 建設省 中部地方建設局

「二世紀をめざしたわが街の河川整備構想」

中津川、四ツ目川、落合川は木曾川とともに、人々にとって一番身近な河川です。その自然環境や流水の利用は、中津川市民に大きな恵みを与えてきました。

その一方、建設省の木曾川砂防流域に指定され、昭和七年の四ツ目川土石流災害を代表例とするように、災害の危険性ははらむ存在です。治山・治水をはじめとする安全防災都市づくりは、中津川市の重要な課題となっています。

こうした安全で安心な街づくりを進めるために、中津川市では河川整備とともに、河川環境を憩いの場とするために、リバーフロント整備事業を行っています。

水辺空間は、人々にとってかけがえない自然環境です。したがって、その整備は河川のもつ特性を十分に生かすとともに、中津川市の歴史や文化と調和した空間整備が必要です。

中津川の整備の方針は、河川から視野を広げた広域的な範囲で展開しています。中津川市役所を中心とした広場の整備、スポーツやレクリエーションに利用できる健康的な広場の整備、クアリゾート湯舟沢周辺の温川・冷川・味噌野沢川にそれぞれ歩道橋を架け、自然が息づく市民の憩いの場を作ります。

リバーフロント整備事業

山紫水明の地は、香りたち 文化のゲートウェイ

ぬけるような秋の空に、美しい姿を浮かべる恵那山。時の流れを包み込むように、穏やかな表情を見せる木曾川。美濃路から木曾路へ。熟成された歳月を、どれほどの旅人が行き交い、心の風景を見つけたのであるうか。中津川。このかぐわしき山紫水明の地に、今日もまた、旅人は足を止める。



県史跡 中山道落合の石畳

旅人を和ませた栗きんとんと五平餅

夏の名残もすっかり影をひそめ、気持ちよほど晴れわたった秋の休日。木曾の玄関口、中津川市では、懐かしい笛や太鼓の音がぬけるような秋の空に響きわたります。背後に雲峰恵那山、眼前に雄大な木曾川を抱く中津川市は、自然と歴史がゆっくりに溶けあつた街。山紫水明の自然美が、歳月に熟成された伝統芸能が、この街のやさしさをさりげなく物語っているように。

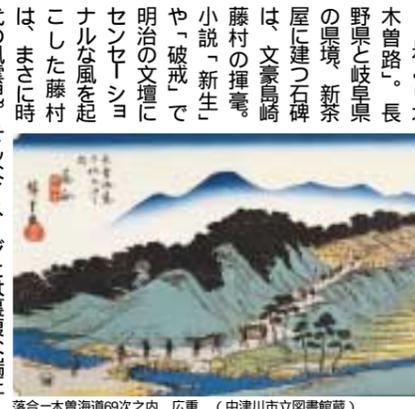
そんな中津川市へはJR名古屋駅から中央本線特急を利用して50分、プラットホームに下りれば、どこからともなく甘い香りが漂ってくるように、旺盛な食欲を刺激されずにはいられません。旅の醍醐味は、まず食にあり。その昔、中山道の宿場町として栄えた中津川は、多くの旅人を迎え、送り出したところ。江戸から京都へ向かう旅人が、すべて山の中といわれた木曾路を経て、美濃路へ足を踏み入れるはじめての宿場町が落合宿であり、中津川宿でした。そこで出された一杯のお茶と二皿のお菓子、疲れきった旅人の身と心をゆっくりにときほぐしたことでしよう。中津川は宿場町であるのと同時に、全国でも三大菓子処のひとつ。中津川といえば、栗きんとんと反応してしまつほど、代表的な秋の風物詩です。きつと、良い栗が近辺で



五平餅

たくさん採れたのでしよう。栗を蒸して、砂糖を加え、茶巾絞りにする。こんなシンプルな製法ですが、やはり、天然モノは違います。一口ほおばれば、素朴でありながら上質、ほど良い甘さが広がって、ついついもう一口、手が出てしまつほどの美味しさです。栗きんとんが秋の王様なら、五平餅はふるさとの味です。全国的な「わらじ形」ではなく、「だんご形」、これが中津川の五平餅です。胡麻や胡桃などをふんだんに使った秘伝のタレが、ミン、一皿五本、の五平餅なんど、とてもとてもいいながら、あつという間に平らげて、後は香ばしい匂いを残すのみ。いつの時代もいつの世も、美味しいものに勝るものはないのかもしれない。

山中薬師の狐膏薬伝説



落合一木曾海道69次之内 広重 (中津川市立図書館蔵)

「是より北木曾路」。長野県と岐阜県の県境、新茶屋に建つ石碑は、文豪島崎藤村の揮毫。小説「新生」や「破戒」で明治の文壇にセンセーションを巻き起こした藤村は、まさに時代の風雲児。そんなイメージとは裏腹な端正なその筆に、作家の繊細な心のうちをかいま見るような気がします。木曾路から美濃路へ続く道。この道はかつて松尾芭蕉や皇女和宮が歩いた道。街道の難所、十曲峠にほど近い、落合川に掛かる下桁橋のあたりは、安藤広重が「木曾海道落合篇」として描いた場所です。路傍の石仏や道標は、昔の旅人の難波を和ませてくれたのでしょうか。昼でもつす暗い街道には、不思議な伝説が残されています。

恵那文楽と中川とも

江戸といつ封建の世を生きた人々のドラマ。厳しい階級社会の中で、耐え、忍び、憂い、そして恋した人々の心の機微を描いた人形浄瑠璃芝居「文楽」は、太夫の語り、三味線の音色、人形使いの繊細な動きが三位一体となつて織りなす世界的な伝統芸能です。淡路の傀儡師(人形使い)が伝えた人形浄瑠璃が、中津川の川上里に人形浄瑠璃の花を咲かせたのは、江戸元禄期。使い手に魂を吹き込まれた人形は、目に光

気ままにJOURNEY



恵那文楽

を宿し、指先に血が流れる。それまでの王朝文化や武家文化にとって代わって開いた大衆文化の花は、仏教の無常観を底流に、人々の涙と汗とそして皮肉なまでに洗練されたユーモアを盛り込んで世に送り出されたのでした。地元で受け継がれてきた恵那文楽を描き続けた女流画家が、明治三年、中津川町の旧家に生まれた中川とも、家に舞台を設けてい



絵を描く中川とも

たほと芝居好みの父親の指導で、幼い頃から漢詩・和歌・歌舞伎などの素養を身につけ、日本画から油彩画の時代を経て、七〇歳を過ぎてから、素朴でありながら大胆な筆使いで際立つ画風を大成させました。後年、文楽や地芝居にテーマを見いだしたともは、芝居絵を中心に創作活動を続け、天



絵本太功記

郷土の偉人、前田青邨

美しい自然や風土、生活を愛してやまなかつた芸術家は、中川ともばかりではありません。日本を代表する画家、前田



前田青邨

衣無縫の画風と、苦悶しながら求めた人生観に裏打ちされた作品は、観る人を圧倒する魅力を秘めています。開明の明治とはいえ、女性にとっては依然光明の見えない時代を生き抜いた中川ともは、自らの人生と文楽の世界を重ね合わせたのでしょうか。彼女が描こつた世界は、この世の通念や常識が誕生する以前からあつたであろう人間の自由と安らぎ。独自の人生観と芸術観を激しく追求した女流画家の作品は、国内外でも高く評価されています。中川ともが描き続けた恵那文楽は、毎年九月二五日、恵那神社例祭に奉納されます。



青邨記念館

青邨もその人、中津川が生んだ偉大な芸術家です。青邨の作品は、風景・人物・歴史画・武者絵・花鳥など、あらゆるジャンルに及び、法隆寺金堂や高松塚古墳の壁画の再現など日本画の枠を越えた大きな業績も残しています。片時もスケッチブックを離さず、写生の大切さを説いた画伯は、一瞬の景色も、ある時はカメラのシャッターより速く正確に写し取つたといわれています。精力的な創作活動で数々の賞を受賞。昭和三〇年には文化勲章を授与され、日本画壇を代表する画家として、広く世界に知られました。苗木城跡の麓に建つ青邨記念館は、本画の他、多くの下図を収蔵展示し、日本画の制作過程をつかえるのが特長です。

中・津・川・市・の・歳・時・記

神明神社例祭「やぶさめ」



-9月17日- 鎌倉時代に創建された苗木神明神社は、江戸時代から始まったという流鏝馬神事が有名です。約20m離れた水田の中に立てた直径1mの3つの的を、馬から2回づつ、計6本の矢で射るもので、命中率が高いほど、その年は豊作であるとされています。

中津川市行事

- 女夫岩神社例祭(桃山女夫獅子奉納).....4月10日に近い日曜日
- 中川神社例祭(中津川太鼓奉納).....4月第2日曜日
- 落合桃まつり.....4月第2または第3日曜日
- 根の上高原つつじ祭.....5月ゴ・ルデンウィーク菓子まつり.....西暦奇数年の5月
- 赤壁城址新能.....西暦偶数年の5月
- 中津川恵北地区産業フェア.....西暦偶数年の5月または6月
- 夏山開き(恵那山 富士見台 根の上高原).....7月1日
- 盆踊り大会.....7月14・15日
- 根の上高原カ・ニバル.....7月最終土曜日~8月下旬
- 夏祭りおいでん祭(創作みこし 風流おどり 流鏝大花火大会ほか).....8月12~16日
- 風神社例祭(安岐太鼓奉納).....8月31日
- 神明神社例祭(流鏝馬).....9月17日
- 恵那神社例祭(恵那文楽奉納).....9月29日
- 八幡神社例祭(神代獅子奉納).....10月5日
- 坂本八幡神社例祭(山紫水明太鼓奉納).....10月第1日曜日午前
- 諏訪神社例祭(諏訪獅子奉納).....10月第2日曜日午後
- 西宮神社例祭(十日えびす).....1月10日



公共交通機関利用
JR中央本線名古屋 中津川.....50分
中央自動車道名古屋 中津川.....約1時間
お問い合わせ
中津川市・中津川市観光協会
〒508-8501 岐阜県中津川市かやの木町2番1号
TEL 0573-66-1111 FAX 0573-66-0634
中津川市ホムベ-ジ
url http://www.takenet.or.jp/n-city/

特集 伊勢湾台風 第四編

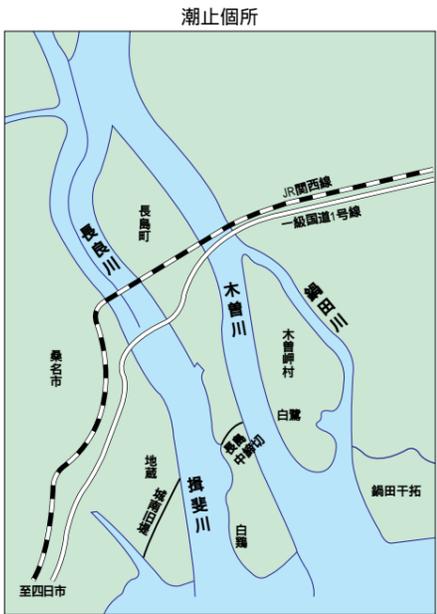
官民一体となって全力を挙げた 堤防決壊口の締切工事

猛威をふるった伊勢湾台風は、無残な爪痕をいたるところに残し、決壊した堤防からは、容赦なく海水が流れこむ状況でした。こうした未曾有の被害を一刻も早く復旧するため、政府は次々に復興対策を実施。建設省をはじめ、自衛隊、学生、地元水防団などが一体となって潮止め工事などにあたり、災害後五三日目には、応急復旧工事を完了させました。

復旧工事に至る立法措置

伊勢湾台風は災害史上、未曾有の被害が生じたことから、政府も全力をあげてその復興対策に乗り出しました。まず、災害三日目の昭和三十四年九月十九日、当時の副総理益谷秀次氏を本部長として、名古屋市内に「中部日本災害対策本部」を置き、災害対策に万全を期しました。ついで一〇月二六日、第三回臨時国会が招集され、災害対策とこれに関する補正予算案などを矢継ぎ早に関係法令を可決、実施に移して、復興対策に対する強い決意を示しました。これらの諸法案は災害復興を早急かつ強力に推進するため、国が特別の措置をとって被災地の公共団体の財政負担を軽減し、あるいは被災者に対する復興資金の特別融資を図ろうとするもので、特に公共土木施設の災害復旧事業費の国庫負担率の引き上げは、昭和二十八年の二三号台風の災害復旧事業に前例があるものの、「激甚地指定」市

伊勢湾台風被災地一覧表



のは、仮締切工法の決定でした。締切には膨大な土量が必要ですが、近くには適当な土採取場もなく、寸断された堤防では多くの資材の陸上運搬が不可能であったため、サンドポンプ船による方法を採用、全国にポンプ船を手配することになりました。ポンプ船の動力源となる電力の早急の確保も、工事の完成を左右する重大な要素でした。被災後、電力回線を調査した結果、一部を除いてほぼ全滅状態であったのみならず、仮締切工事は既往の電力を復活するだけでは容量不足であったため、変電所の新設が必要となりました。こうした状況下、中部電力の昼夜兼行の作業の結果、予定日までに完成することができました。

木曾川河口付近の仮締切工事は、愛知県側は愛知県が担当し、三重県側は中部地方建設局が担当することになりました。愛知県側では海岸堤防の締切はポンプ船による方式で、河川堤防は主として杭打土俵詰工から実施し、その後、ポンプ船によって土砂を吹き上げ補強しました。

直轄潮止工事の経過

伊勢湾台風災害の中心部となる木曾三川の河口付近は、建設省の直轄区域であり、災害発生後、総力をあげて、各種建設機械、サンドポンプ船を集中配置し、工事に備えました。



仮締め切り堤を作る



伊勢湾仮締めめの仕切り

応急復旧の計画にあたっては、まず、桑名市と長島町の比較的破壊箇所が少ない北部を区切って一刻も早く湛水面積を縮小することとし、桑名市側の城南旧堤防は一〇月一四日に締切り、地蔵堤防は一〇月一七日の大潮の日にポンプ船一隻を投入して潮止め、一〇月五日、城南干拓堤防の潮止め完了で桑名市側はすべて完了しました。長島町側は、中央部の旧堤防を利用して北部を先に潮止めする計画で進め、松ヶ島堤防を一〇月一〇日、大島堤防を一〇月一四日潮止めした後、都羅堤防は一〇月三日に潮止めし、残る旧堤防の中仕切を一〇月一四日に完了させました。これによって、長島町の北部を水から救い、国道一号の通行も回復することができると、以後の工事に重要な役割を果たしました。

木曾岬村現、木曾岬町(では、交通事情のため本格的な復旧はやや遅れましたが、一〇月一七日に田代・白鷺地区、一〇月三〇日に鍋田川右岸堤防の締切工事に着手しました。長島町の南部は他の工事に比べ困難を予想さ



35日ぶりに結ばんとする一般国道1号

町村の財制負担の軽減を図るといつまでも新しい方式でした。また、伊勢湾台風等による災害をかんがみ、再度災害の充分な防止を期するため、災害復旧事業と合併して施設の改良・新設事業を行うことになりました。この他、使用した水防資材にも国庫補助の特例などが可決されました。

中部地方建設局の災害緊急体制

中部日本災害対策本部は、応急復旧対策として、名古屋港から木曾三川河口は被害程度が甚だしいうえ、背後の湛水面積が広大であることから、一刻も早く仮締切を完了させるため、木曾・長良・揖斐の各河川及び木曾岬・長島・城南の仮締切は建設省が、それ以外は愛知・三重両県の施工区域とするともに、仮締切計画を定めました。愛知・三重・岐阜三県を管轄する中部地方建設局では、災害の状況把握につとめ、災害現地との連絡その他応援等の緊急処置をするとともに九月三〇日には、伊勢湾台風災害対策要項」を定め、これに基づき、「災害対策本部」を設置、特に被害の大きかった木曾川下流工事事務所をはじめ、木曾川上流工事事務所、名古屋国道及び三重の各工事事務所に「災害対策部」を置くこととしました。対策本部は、各班がそれぞれの業務分担により、特に急を要する測量班の編成及び設計担当職員・事務職員の応援派遣をはじめ、締切に必要なポンプ船の確保及び船舶機械、トラックなどの応援派遣や配置、電力設備の復旧並びに増設、その他の復旧資

れましたが、松隆堤防を一〇月六日、伊勢島堤防を一〇月七日、長島海岸堤防その一を一〇月七日、その二を一〇月八日にそれぞれ締切り、最後に残った白鷺堤防の潮止めに全力を集中し、一〇月一八日に締切りしました。こうした一連の工事は困難を極め、一時は復旧のめどもつかず、前途に暗たんたるものを思わせる惨状でしたが、官民一体となり、昼夜をわかれ作業を続けた結果、予定より早く、被災後五三日目にして、潮止めの工事を完了することができました。

国道の応急復旧

名古屋と四日市を結ぶ唯一の大動脈であった国道一号の復旧は、救援物資や復旧資材の輸送のために、早急の課題でした。こうした交通輸送を確保するため、建設省名古屋国道事務所では、とりあえず第一期として名古屋



ドラム缶を運ぶトラック

材の粗朶、玉石などの購入等を、交通も通信も途絶状態のなかで、着々と進めていきました。

応急仮締切工事

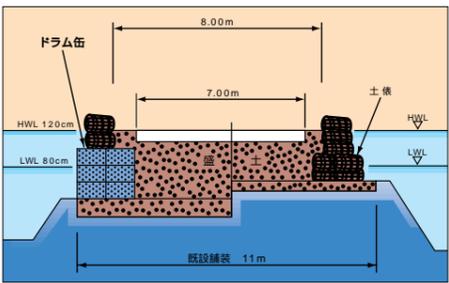


仮設ポンプによる排水作業

伊勢湾台風による破壊決壊口及び決壊口は、愛知・岐阜・三重の三県にまたがり、その数二〇箇所、総延長三三、一六mと広域に及びました。加えて、破壊箇所から流入した海水は、海岸から一五kmも離れた津島市まで湛水しました。こうした湛水を一刻も早く排水することが望まれましたが、潮の出入りする破壊箇所は舟でしか行き来できないため、作業はなかなか進められず、中部地方建設局をはじめ、自衛隊、学生、地元水防団が一体となって全力をあげる必要がありました。



木曾川左岸雁ヶ池付近締め切り工事



市から蟹江町間を土俵積みにて復旧し、蟹江町から弥富町間は約一三kmで国道の両側に土俵を一m間隔に二列積み、その間に粘性土を充填すると同時にビニール布を内側に張って遮水し、路面の目地及び土俵の間から浸水する水はポンプで排水しました。蟹江町から弥富町間のドラムかん工法は、湛水の流れが激しく、両側に土俵を積み重ねね押さえることができなかつたことから採用された工法で、空のドラムかんを現地まで運び、そこで土砂を入れ道路の両側に沈め、その間を盛土し道路を高上げしました。この工法により復旧された区間は蟹江町から弥富町間の冠水区間四kmのうち一五km、その他は土俵積みで、工事は一〇月二〇日より二四時間体制で実施、一二月四日から交通解放することができました。

参考文献

- 伊勢湾台風復旧工事誌・上巻
建設省 中部地方建設局
木曾三川治水 百年の歩み
建設省 中部地方建設局
高潮堤防緊急高上工事誌
建設省 木曾川下流工事事務所
高潮堤
建設省 中部地方建設局

伊勢湾等高潮対策事業

(昭和三十四年二月二日 法律第一七二号)



黒田 晃氏

略歴
桑名市出身
大正13年1月29日生

現 日本工営(株)取締役会長
" 社団法人雨水貯留浸透技術協会 会長
" 財団法人道路保全技術センター 理事
" 社団法人日本ダム会議 理事
" 国際ダム会議 国際河川分科会委員
元 木曾川下流工事事務所 副所長
" 中部地方建設局 局長
" 北海道開発庁 事務次官
" 社団法人建設コンサルタント協会 会長
" 社団法人日本ダム会議 会長

破堤ヶ所の締め切り

濃尾平野に甚大な被害をもたらした伊勢湾台風の襲来から早くも四〇年が過ぎようとしている。当時現場で復旧に日夜尽力された中部地方建設局長・河川部長・工事事務所長は既に他界されており、この際風化してゆく記憶をよびおこし、木曾川下流工事事務所が担当した伊勢湾等高潮対策事業にかかる災害復旧工事のうち破堤ヶ所の締め切り完了までの経過をたどってみたい。

昭和三十四年九月二日マリアナの東にあつた熱帯低気圧が急速に発達して、二日九時には台風一五号となり、二日一八時すぎに湖岸の西およそ一五kmの所に中心が上陸、潮岬では一八時一三分最低気圧九・五、鈴鹿一八時には奈良・和歌山の県境、二時鈴鹿峠附近を通り、二時播磨川の上流に達し、名古屋では最大風速三七・〇を観測した。二時三十分名古屋港で最高潮位二・八九mとなり、昭和三十四年三河湾を中心として大災害となつた台風一三号の時よりも潮位は一五三

m高かつた。

気象台では九月二日一六時三〇分台風情報五号を出し、高潮は一・五m位となり、二八年の二二号台風の時のような被害の恐れがあると警告していた。

過去における台風による高潮の記録

発生年月日	発生場所	最大気象潮(m)
大正 3年8月29日	有明海	2~2.5
6年10月1日	東京湾	2.3
昭和 2年9月13日	有明海	約3.0
9年9月21日	大阪湾	3.1
20年9月17日	鹿児島湾	2.0以上
25年9月3日	大阪湾	2.4
34年9月26日	伊勢湾	3.6

台風当日、私は所用があつて地方建設局庁舎におりましたが、夜になると風雨は一段と激しくなり、木曾川下流工事事務所との無線連絡がとれなくなつた。この無線連絡は堤外情報の入つた。当時の事務所は堤外地高水敷にあり、無線室が台風のたけに水浸しになつて送受信ができな

木曾川下流工事事務所関係浚渫船一覧表

船名	作業地	動力	馬力HP	所在地	出航日	現地到達
長田丸	揖斐川	電動	600	木曾川	—	10月5日
大興丸	"	"	1000	四日市	10月14日	10月14日
才一宝津丸	"	"	"	"	10月9日	10月9日
迎録丸	"	"	"	四国	—	—
大栄丸	"	ディーゼル	1350	大阪	10月5日	10月10日
香取丸	"	"	200	四国	—	—
児島丸	木曾川	電動	1000	木曾川	—	10月15日
長島丸	"	"	1200	四国	10月9日	10月15日
才二末広丸	"	"	750	横浜	10月14日	10月18日
鶴見丸	"	"	700	"	10月15日	10月25日
筑紫丸	"	ディーゼル	200	四国	10月11日	10月16日

くなつたのである。軽く考えていました。夜が明けると二七日は台風一過の秋晴れで、鈴木工務課長(故人)が木曾川下流工事事務所へ様子を見に行くと、局から出かけたが、暫くして戻つて来て、名古屋駅附近は水浸しで、国鉄、私鉄とも不通であるとの報告を聞いて、事の重大さを知りました。

太平洋岸では台風が西側を通る時は警戒を要し、特に来襲時刻が大潮の満潮時に近いときは最も恐ろしく、又気圧一mの差で約1mの海面上昇となるが、台風の通過コース、台風の気圧の低さ、台風による強風と云つて悪条件が重なり、伊勢湾に過去に見られない高潮現象が生じて、木曾川下流工事事務所職員六人、その家族六人、労働者一人の殉職を始めとして五〇〇人を越す死者、行方不明者を出した大災害となつた。

台風が過ぎて一夜明け、さうそく被害状況を把握しなければならなかつたが、各所で破堤し、一面はうな原と化し、陸路は閉ざされてあり、舟に頼るしか交通の手段はなかつた。先づ各地から舟を集めることが第一の仕事であつた。又、航空写真を撮つて災害の全貌を把握し、更に各事務所へ測量隊の支援を

お願いして集めた舟で測量を行った。堤防の測量が次々に完了し、全体の現状が判明するにつれて応急復旧工事の工法の検討が始まつた。破堤ヶ所の締め切りに要する膨大な土量をどこから採取し、運搬するかであるが、堤内は浸水のため通れず、堤防も寸断されてトラックによる土運搬は不可能であり、浚渫船を使う以外に方法がないと考えた。長年木曾川下流部の浚渫事を施工して慣れており、又二六年一〇月リス台風によって破壊した城南導水堤の締め切り、二八年九月三号台風によって破壊した豊橋市神野海岸堤の締め切りの二回にわたつて浚渫船を使って締め切つた経験をしてきたことから、この工法を採用することとなつた。問題点としては全国各地に点在する浚渫船を何隻集められるか、浚渫船の電源の記録工事が早急に行えるか、更に交通状況が混乱している中で必要とする大量の石、石材等の資材が集められるか等の問題があつた。

政府は事の重大さにかんがみて、早急に緊急対策をたてる一方、浚渫船の集結、復旧資材の手配、被災者の撤出、援護の基本計画を立てると共に地方関係者を奨励する目的をもつて、中部日本災害対策本部を九月九日名古屋に設置し、益谷次次副総理を本部長に任命した。

事務所は一〇月一五日現地到着を目標として対策本部に浚渫船の集結を依頼し、本部では全国浚渫業協会の代表を中部地建に集め、浚渫船の集結いかんによって復旧作業の見通しが明らかになるので、全国で行われていた海岸埋土工事を一時中止してでも締め切りに動員することとした。その結果全国から総馬力数一五〇〇〇HP、三二隻の浚渫船の配置が決まり、これは全国可動能力の二五%にもなつた。こうして仮締め切り完了は、長島・木曾岬地区は台風襲来後五五日目の一月一〇日と決定された。又、城南海岸を含めて木曾川下流地区の締め切り工事は木曾川下流事務所所長と決めた。

そだ集積状況

産地	期間	数量(束)
岐阜県揖斐川水系	9月29日~10月31日	65,330
三重県宮川水系	10月11日~10月31日	168,188
大阪・京都淀川水系	10月16日~11月8日	37,433
愛知県矢作川水系	10月8日~10月31日	22,339
静岡県天竜川水系	10月9日~10月31日	42,418

かます集積状況 9月29日~11月29日

産地	数量(ヶ)
大阪	244,770
岐阜	35,590
三重	31,180
香川	16,000
静岡	10,000
富山	3,000

浚渫船の動力源である電力の確保が締め切り工事の完成時期を左右する重要な要素であり、既設の電力供給施設の復旧の他に一〇〇〇kwの供給を中部電力と協議し、昼夜を問わず作業を行い一〇月一五日までに整備した。又、石、割石、かます等の資材は締め切り工事に支障のないように収集しなければならぬので、工法が決定されると同時に発注し、建設機械・運転手の派遣応援を各地建に依頼した。しかし輸送は国道一号线の冠水により各地で交通途絶しており、資器材の輸送は困難をきわめた。

海岸堤破堤五〇ヶ所、河川堤破堤二ヶ所を含めて全壊延長約九〇〇mの原型復旧を翌年の台風季までに完了しなければならぬ。このためには工事事務所従来職員の不足を補うために中部地建管内はもとより、他の地方建設局にも職員の応援派遣を求めた。この人々の宿舎・食糧をどう確保するかも問題であつた。又、堤防は寸断されており、道路は冠水して陸つたに締め切り現場まで資器材を輸送することは不可能であつた。そこで初めのうち現場への水上輸送を海上自衛隊舟艇の応援を得て行わざるを得なかつた。

この様な準備を経て一〇月四日、長良川左岸伊勢湾大橋附近の締め切りに着手したのを始めとして、十一月八日長良川左岸白難地区の締め切りを最後に、五日で完了の当初計画を五日で完了することができた。これは地元の人々・工事事務所職員・締め切り工



緊急締め切り状況(木曾岬村白鷺)

事関係者・資材納入者をはじめとする関係者が、いろいろな困難を乗り越えて一刻でも早く締め切りたいと努力していただいた結果、予定よりも二日早く締め切りが終わり、冠水地区の排水にとりかかることができたと思えます。

最後の締め切りとなつた白鷺地区では締め切りが進むと共に流速は大きくなり、浚渫土砂をどれだけかき流してもまだ沈床と共に流されてしまい難航をきわめた。

一日も早く締め切るために、潮汐に関係なく工事を強行したせいもあり、小西河川部長故人が現場で陣頭指揮をとつている間は締め切りが成功しないとのシンクスも今は語り草となつた。



締め切り口まで手渡して運ぶ土のう(長島町白鷺)



最後の仮締め切り工事後(長島町白鷺)

BOOK LAND

体験 伊勢湾台風

語り継ぐ災害・復旧

建設省木曾川下流工事事務所
木曾・長良・揖斐川のいわゆる木曾三川は、近代的な改修工事が始められてから、百年以上の歳月が流れた。この間、治水工事が、特筆すべきものとして三川の分流を実現した木曾三川下流改修(明治改修)と伊勢湾台風復旧工事をあげることができよう。

中でも、昭和三十四年に襲撃した伊勢湾台風は、災害史上最大級のものであり、復旧における計画、工事等の技術、資器材の投入をはじめとする方針、対策等は、以後の防災対策、災害復旧制度、土木技術の進展に大きな役割を果たしています。

もとより災害防止は、治水事業の重要な目標のひとつですが、自然の猛威は想像を超える場合もあります。災害の襲来によって初めて危険な状態を知らされる、いわば経験によって得ることも多いのですが、かといって、過去の悲惨なできごとを繰り返すわけにはいきません。

伊勢湾台風を体験した木曾川下流工事事務所当時の職員等の記録等をまとめた本書は、災害に遭遇した先輩諸氏の体験がそのまま描写されており、まさに貴重な資料です。今後の災害発生時における有効な指針となることとしよう。



民話の小箱

赤壁城

むかしむかしのお話です。

木曾川の深い淵をのぞむ高森山に、赤壁の苗木城が建っていました。

苗木のお城は、昔から白い色を嫌うならわしがありました。

というのも、お城の祖先が戦に負け、ほら穴に隠れていたとき、

飼っていた白い犬がご主人を見つけてうれしそうにほえ、

それを敵が見つけて殺されたことから、

この戒めが生まれたのです。

苗木城は、山道を行く旅人たちがいかだ流しの人夫たちの、旅の道標

全国的にも珍しい赤壁は、旅人たちの心をなごませていたのですが、

殿様をはじめ、苗木に住む村人たちは、

赤壁をいつも引け目に思っていました。

やがて時代は下り、平和がおとすれて

戒めは、ただの言い伝えにすぎなくなっていたのでしよう。

ついに人々は古くからのならわしを破り、

城壁を白く塗りがえてしまったのです。

「これで、苗木の自慢がひとつ増えた」

殿様も村人たちもそういつてたいそう喜びました。

が、その時、

黒雲がまたたく間に空をおおい、

突風とともに激しい雨が降りだしました。

どどん、どどんと山から山へびきたわたる雷

人々が慌てふためいていると、

突然、木曾川の水が大きな水柱となって吹き上げ、

お城の天守閣をいく重にもとり巻いた水柱は、

恐ろしい銀色の竜に、その姿に変えたのです。

竜は大きな目玉をくわつと見開き、するどい爪で白壁をはがし始めました。

殿様は、怒りに満ちた竜の顔を見てはっとしました。

「あの竜は、私たちに白い色の戒めを思い出させてようとしている、

ご先祖様の姿に違いない」

みるみる間に白壁ははがされ、お城はもとの赤壁にもどってしまいました。

銀色の竜は光とともに空に昇り、黒雲は四方に流れ散っていきます。

殿様たちは、しばらくぼんやりと赤壁のお城を見つめながら、

ご先祖様の苦しかった時代を忘れていた、今の自分たちのことを思いました。

それからもう、苗木城が白壁に塗りがえられることはありませんでした。

お城は赤壁城と呼ばれ、苗木の人々も誇りに思うようになったそうです。

お城を失った今、苗木城跡は国の史跡とされるとともに、

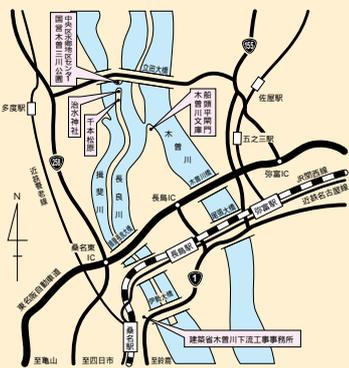
長い歴史の面影を伝える、中津川市の文化スポットとして親しまれています。

参考文献「中津川のむかし話」 社団法人中津川青年会議所発行

恵那児童文学の会編集



木曾川文庫利用案内



《開館時間》午前9時～午後4時30分

《休館日》毎週月曜日・祝祭日・年末年始

《入館料》無料

《交通機関》国道1号線尾張大橋から車で約10分

名神羽島I.Cから車で約30分

東名阪長島I.Cから車で約10分

《お問い合わせ》

船頭平閘門管理所・

木曾川文庫

〒496-0947 愛知県

海部郡立田村福原

TEL(0567)24-6233



編集後記

紅葉が美しい季節となりました。

今回の編集にあたって、中津川市並びに関係の皆様にご大変お世話になりました。次回は長野県王滝村を特集します。

【訂正とお詫び】

KISSO Vol.27(墨俣町特集号)4頁に、誤りがありましたので、下記のように訂正させていただきます。

【誤】莫大な数量の築城諸材は七曾・八曾(岐阜七宗町)で伐りだし、錦織濱(八津津町)から、飛騨川を利用して運輸。

【正】莫大な数量の築城諸材は七曾・八曾(七曾は今の岐阜県七宗町、八曾は愛知県犬山市あたりを指すといわれています)で伐りだし、木曾川を利用して運輸。ここにお詫び申し上げます。

木曾川文庫ホームページ

<http://www.kisogawa-bunko.cb.moc.go.jp>

表紙写真

右上:「是より北木曾路」の碑 左上:池の谷第2砂防ダム
右下:中山道落合宿本陣 下:国史跡 苗木城跡と木曾川

『KISSO』Vol.28 平成10年10月発行

発行:建設省中部地方建設局木曾川下流工事事務所 〒511-0862三重県桑名市播磨81 TEL(0594)24-5715

木曾川下流工事事務所ホームページ URL <http://www.cb.moc.go.jp/kisokaryu>

制作:財団法人河川環境管理財団 〒450-0002愛知県名古屋市中村区名駅四丁目3番10号(東海ビル) TEL(052)565-1976